

修士論文（要旨）
2009年7月

感謝と謝罪をめぐる日西対照研究

指導 青山文啓 教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4008
清水慶子

目次

はじめに	1
第1章 データの概要と分析方法	2
1.1 日本語データの要約	2
1.2 スペイン語データの要約	5
1.3 データ：表記の原則と「話し手」の認定について	6
1.4 分析の対象と方法	7
第2章 スペイン語の相手を指す代名詞および動詞の活用	8
2.1 相手を指す代名詞について	8
2.2 命令形について	9
2.3 スペイン語の命令形	11
第3章 呼びかけについて	12
3.1 呼びかけの機能および日本語における呼びかけ	12
3.2 多様なスペイン語の呼びかけ	15
第4章 スミマセンの各機能について	20
4.1 スミマセンの3つの機能と使用条件	20
4.2 社会的関係、上下関係を反映する「注意喚起」の機能	25
4.3 「前置き」の表現 依頼と質問を中心に	35
4.4 「謝罪」の機能 自由意志か強制か	53
4.5 「感謝」の表現	67
4.6 申し訳なさを表す「恐縮」の機能	78
まとめ	90

参考文献

資料

要旨

本研究では、日本語のすみませんが持つ3つの機能である注意喚起、感謝、謝罪と、それに関連する、呼びかけ、依頼、命令といった項目を扱い、感謝と謝罪における日本語とスペイン語の違いを比較対照していく。

すみませんを使用する条件は、[I]話し手と聞き手の社会的関係がソトであり、[II]話し手と聞き手の間に上下関係が存在するという2点である。社会的関係とは、話し手と聞き手の間に存在する心理的な距離のことを指し、ウチ/ソトの2つに分ける。ウチは、家族や親しい友人、恋人などのごく親しい人々を指し、ウチの関係以外の人全てが話し手にとってソトの関係となる。また、上下関係とは、場面における役割の違いであり、目上/同等/目下という3つの基準で表す。先行研究を元に仮定すると、話し手と近い距離にいるソトの聞き手への配慮が大きく、すみませんが多く使用されると考えられる。この社会的関係、つまり聞き手との距離は、日本語とスペイン語において非常に異なる。日本語の行動規範は他者との距離を保ち、近寄りすぎないことを重視する。一方、スペイン語では日本語とは対照的に、他者との距離を縮めより親しくなることを重視するからである。

この差は特に呼びかけにおいて顕著である。日本語では、できるだけ相手に呼びかけることを避ける。一方、スペイン語では繰り返し相手に呼びかけることで相手への親しみを表し、謝罪や依頼という、聞き手にとっても話し手にとっても負担となる場面で効力を発揮する。

注意喚起の目的は、話し手が自分の存在を伝え、行動を遂行するために、聞き手の注意や感心をひくことである。その際、すみませんは、話し手の周囲に聞き手の候補が存在する場合、しない場合のいずれにも使用される。話し手と聞き手の社会的関係により、話し手は注意喚起の方法を選択する。すなわち、日本語であれば、聞き手の名前やタイトルを呼ぶ、呼ばないという選択であり、スペイン語であれば、動詞の人称の選択である。それぞれの選択には、社会的関係や上下関係、話し手の置かれた状況が影響を及ぼす。

注意喚起の後、聞き手にとって不快な状況を提示する場合、話し手は「前置き」を使用する。依頼を例に見ると、聞き手の負担を認識し配慮するという点では、両言語に大きな差は見られない。ソトの関係である聞き手への依頼では、日本語では前置きが使用される。スペイン語では条件法が使用され、理由が述べられる。しかし、相手へのアプローチには違いが見られる。依頼を遂行するために、日本語は前置きを使用し「負担をかけて悪い」と自分を低める。反対にスペイン語では、理由を述べることで相手の理解を求め、呼びかけや、“por favor”（直訳）「お願いします」を使用して相手を高める。一方、ウチの相手とは、それまでの交流の蓄積からこうした配慮表現が少なくなるのは、日本語もスペイン語も共通である。また、データからは、依頼や個人的な質問以外にも、相手の勧めを断る際などに、日本人は聞き手の迷惑を推論し前置きを使用することがわかる。

謝罪においても依頼と同様に、相手へのアプローチで差が現れる。日本語では、「形式だけの謝罪」であっても、まず謝罪をすることが求められる。謝罪の表現を使用し、自分を低めることで、相手の許しを得ようとする。一方、スペイン語では謝罪表現とともに使用されるのは、呼びかけ、理由を述べる、相手の有能さや重要性を伝えるといった方策である。スペイン語では依頼と同じく、相手を高め、相手におもねる傾向があると言っていいたいだろう。

感謝と恐縮の場面においては、日本語とスペイン語で大きく異なる。聞き手の行動により、話し手に利益がもたらされると、日本語の話し手は、相手に対する感謝と、申し訳ないという借りの気持ちを持ち、恐縮する。感謝にはアリガトウを使用し、恐縮にはすみませんを使

用する。しかしスペイン語においては本研究のデータを見る限り、感謝と恐縮をスケールとして表示する傾向は現れない。

スママセンとアリガトウを比較する場合、大切なのは話し手と聞き手の社会的関係である。スママセンを使用できるのは、話し手と聞き手がソトの関係という場合であり、アリガトウを使用できるのは、話し手と聞き手がウチの関係という場合である。スペイン語においては、感謝と恐縮の表現に日本語ほど大きな違いは見られない。日本語で恐縮を表現する場面では、スペイン語ではより強い感謝となり、感謝の表現を重ねる、呼びかけを多用するなどの傾向がある。こうしたウチとソトの区別は、今回のデータを見る限り、日本語ほどは明確ではないようである。

全体を通じて言えるのは、日本語話者とスペイン語話者の、それぞれの対人距離の違いが、言語行動にも影響を及ぼしているということである。近づくことを避け、距離を保つことで敬意を示す日本語と、相手に親しみを与え、より距離を縮めることを好むスペイン語とで、同種の場面でも、このような表現の違いが出るのは、非常に興味深いといえる。

参考文献

井出里咲子(2005)「スモールトークとあいさつ 会話の潤滑油を超えて」『講座社会言語科学

第一巻 異文化とコミュニケーション』ひつじ書房 pp.198-215

大倉美和子(2000)「依頼のポライトネスー日本の大学生とメキシコの大学生ー」『日本語とスペイン語(3)』国立国語研究所 pp.212-240

小川治子(1995)「感謝とわびの定式表現ー母語話者の使用実態の調査からの分析ー」『日本語教育』85号 pp.38-52

熊取谷哲夫(1993)「発話行為対象研究のための統合的アプローチー日英語の『詫び』を例にー」『日本語教育』79号 pp.26-40

サール,J.R.(1970)『言語行為 言語哲学への試論』(坂本百大・土屋俊 訳) 勁草書房

佐々木倫子(1998)「英語の呼びかけー名前・略称・愛称ー」『日本語学』第17巻9号 pp.60-65

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書

鈴木孝夫(1998)「親族名称の用法をめぐって」『言語文化学ノート』大修館書店

中山治(1989)『「ぼかし」の心理』創元社

西原鈴子(1994)「感謝に関する一考察」『日本語学』第13巻8号 pp.4-9

バーンランド,D.C.(1979)『日本人の表現構造：公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』

(西山千・佐野雅子 訳)サイマル出版

福寫教隆(1995)「表現6 丁寧」『中級スペイン語文法』山田善郎編 白水社

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版

三宅和子(1994)「『詫び』以外で使われる詫び表現ーその多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係ー」『日本語教育』82号 pp.134-146

山本もと子(2003)「感謝の謝罪表現『すみません』ー『すみません』が感謝と謝罪の両方の意味を持つわけー」『信州大学留学生センター紀要』第4号

Hickey, Leo. (2005) "Politeness in Spain: Thanks But No 'Thanks'." *Politeness in Europe*. Bristol: Multilingual Matters.